

原理論における外的条件の処理方法

— 山口重克「段階論の理論的必然性」によせて —

小幡道昭

目次

1	「原理論の限界」に関する一般的考察	2
1.1	原理論と中間理論との関係	2
1.2	原理論の限界の一般的意味	5
1.3	ブラック・ボックスの埋め方	10
2	「ブラック・ボックス」の多義性	15
2.1	外面的ブラック・ボックス	15
2.2	規定的ブラック・ボックス	18
2.3	暫定的ブラック・ボックス	24

経済学方法論として宇野弘蔵氏が提示した、原理論と現状分析の間に発展段階論という独自の領域を設定すべきだとする、いわゆる三段階論をめぐって、近年、山口重克氏により新たな展開の試みが示されている。ただ、その斬新さにもかかわらず、『価値論・方法論の諸問題』（お茶の水書房、1996年）の「はしがき」によれば、この試みに対しては、以前の論稿も含めて未だ批判的に検討されることがないままであるとのことである。そこでここでは山口氏の方法論が比較的まとまったかたちで提示されているように思われる「段階論の理論的必然性 — 原理論におけ

るいくつかのブラック・ボックス —」（山口重克編著『経済システムの理論』お茶の水書房、1992年）を取りあげ、その問題点を指摘しつつ、あわせて管見を提示することにした。

1 「原理論の限界」に関する一般的考察

1.1 原理論と中間理論との関係

この論文に示された方法論の最大の特徴は、原理論の内側から段階論の必要性を問いなおしてゆこうとする姿勢にある。山口氏は段階論の必要性をまず次のようなかたちで説く。「経済学の基礎理論は、これまで一般に純粋資本主義論として構成されてきているとあってよいだろう。しかし、現状を分析するための用具として役に立つ経済理論はどのようなものであるべきかということになると、それはこのような基礎理論だけでは不十分で、この他に不純な資本主義としての混合資本主義についての類型論のようなものが必要ではないかと考えられる。この後者は、抽象的な純粋資本主義論と現実の具体的な資本主義との間を架橋する中間理論とでもいうべきもので、宇野理論における段階論がほぼこれに相当するといえよう。」（3頁）ここでは現実の資本主義はいずれも「不純な資本主義としての混合資本主義」であるという認識に立ち、その分析には二通りの分析用具が必要となるという考えが示されている。そのなかで宇野氏の原理論が「基礎理論」とよばれると同時に、段階論も「中間理論」とあるというように言い換えられることになる。この中間理論ということの意味は直接は説明されていないが、それが「具体的な歴史的現実をある基準によって段階的に区切ってみせるだけというような方法」（3頁）に対する批判的視点から推して、段階論も何らかの意味でやはり

一種の理論たるべきことをあらためて強調したものとみてよいであろう。従来の段階論のこうした限界をふまえて、「本稿の課題は、経済理論は分析用具としてはどうして原理論だけでは不十分で、段階論を必要とするのか、原理論の分析用具としての限界とは何か、を明らかにすることによって、段階論が要請される理論的必然性を原理論の側から追求してみることである」(4頁)という。こうして「原理論と段階論の必然的な理論的補足関係を積極的に明らかにする」(4頁)ことができれば、単なる便宜的な段階区分とは異なる理論的必然性を示素ことができるだろうというのである。

私もこのような消極的な意味であれば、それが中間理論である必要性について山口氏に異論はないし、原理論と段階論との関係が原理論の側から再検討されるべきであると強く感じている点も同じである。そのうえで、ここでの山口氏の見解には次の2点でなお疑問が残るのである。第1に、ここで批判的に示唆された非理論的な方法ではまずいという点をこえて、それがいかなる意味で理論たりうるのか、それを理論たらしめる独自の展開方法とはなにか、こうした中間理論に対する積極的な基礎づけはここではほとんど与えられていない。原理論が現状分析の用具としてはなお不十分であるという限界が示されれば、原理論という理論からの要請であるがゆえに、その要請に応える段階論もまたやはり理論たるべきだということになるのかどうか、この点がはっきりしないのである。段階論ないし中間理論というのは所詮そうした理論的要請にこたえるだけものでしかないのであり、「独立の理論分野としての必然性」(4頁)とはいうものの、それ自身が固有の理論的展開を内包するわけではないというのが山口氏の真意なのかもしれない。しかしそうであれば、原理論からの要請は明らかにされたにせよ、段階論とよばれるものの内

容は、「具体的な歴史をある基準によって段階的に区切ってみせるだけというような方法」（4頁）と、この「ある基準」のとりかたに「理論的補足関係」という多少付加要素はあるものの、けっきょくのところ、内容上大差はないのではないかとと思われるのである。

第2に、第1の点と関係することであるが、ここでの説明では原理論と段階論とが現状の分析用具としてどういう関係にたつのかという点もまた明らかではない。両者は現状分析のための用具として、併存して利用される関係を想定しているのか、あるいは、原理論はいったん段階論というかたちをとって間接的に現状分析に役立つと考えているのか、という点が疑問として残るのである。「経済理論は分析用具としてはどうして原理論だけでは不十分で、段階論を必要とするのか」（4頁）という場合、原理論は分析用具として直接に現実に適用してよいが、ただそれだけでは不十分であるというのか、そもそもそうしたかたちで原理論を直接適用することに無理があるのであり、段階論の展開を媒介としてはじめて現状分析に適用すべきであるというのか、この点が明確ではないように思われる。従来どちらかというところ、原理論は直接に現実に適用すべきものではなく、あくまでも段階論を構築するための基準ないし手段と見なされてきたきらいがあるが、山口氏の議論はその点でいうと、原理論そのものもやはり「分析用具」であるという主張を強めているように思われる。そうであれば、原理論はそれ自身独立に分析用具として適用されるとともに、それでは分析できない残余部分を分類整理する用具として段階論というものが並行して必要となるということになるであろう。もしそうでないとするれば、段階論は原理論と別個なものとして分析用具を構成するのではなく、原理論は段階論というすがたにいちど転換され、特定の構造と運動様式を具えた一つの経済社会像を介して現状分

析の用具となるということになる。この点はやがて詳しく論じるように、原理論的な要因と段階論的な要因とが分離可能かどうかという問題につながる。もし分離可能であれば、かりにいったん特定の経済社会像を構成したとしても、そのなかで両者の要因は別個に存在するわけであり、したがって事実上並列適用の場合と変わりはない結果になるからである。実はこの点に疑問の一つの中心があるのであり、やがて論じるように私自身はこの分離可能性を否定し、その意味で原理論と段階論との区別そのものも統合的に再構成すべきではないかと考えている。ただ一気に問題を核心に進めるまえに、もう少し山口氏自身の考え方に即して検討を加えておこう。

1.2 原理論の限界の一般的意味

以上のように段階論の理論性を強調しつつ、山口氏は原理論の内側に視点を転じ、段階論を要請せざるをえないような原理論の限界に関して、具体的内容に先だつてまずその一般的意味を論じている。それはまた、段階論がいかなる意味で「独立の理論分野」でありうるのか、その積極的な規定をある範囲で含んでいるようにもみえる。山口氏はここでもう一度、純粋資本主義論は現実の資本主義が市場経済関係の一元的な純粋化を展開せず、実際にはつねに市場経済的でないものとの「混合体制」（4頁）でしかなかったために逆に理論的に要請された面があるという点を確認した後、この「本来的に混合的な経済システムの理論としての資本主義の経済理論」（5頁）には原理論だけではなく段階論が必要となるのだと繰り返している。この場合一つ注意すべき点がある。それは従来この純粋化という概念は、少なくとも宇野氏の展開においては一定の傾

向として時間の流れのもとで捉えられきた点が、山口氏の場合には著しく後退している点である。すなわち、純粋化に対して一般にそれがある時点で逆転して不純化が進行するようになったという枠組みで整序されているわけではないのである。山口氏はおそらく意識的にこのような純粋化傾向とその逆転という問題構成をはずしている節がある。これは従来の段階論の多くが、けっきょく「現実の資本主義が、歴史的に発展・変化してきたという事実」を、いわばただ反映しただけの没理論的な記述に傾いていったことへの批判に根ざすのかもしれない。私もここまでは山口氏に同感するところが多いのであるが、注意すべきは、純粋化とその逆転という問題構成を棄却することはけっして資本主義経済の変化の動力を理論的に追求することをやめることと同義ではないという点である。資本主義経済の変化が実際には純粋化とその逆転という簡単な関係に還元できないとしても、しかしそうした時間の流れのなかで観察される構造上の変容を惹起する基本的な機制を抽象化し一般化することは可能かもしれない。変容の具体的内容は多様かもしれないが、変容を生み出す動力のほうは単純化して捉えることができるかもしれないのである。山口氏の議論は、単純な純化・不純化論の棄却とともに、変容の動力に対する理論的追求をいっしょに没却してしまったのではないか。その結果、多様な変容に対して、段階論は「類型論のようなもの」(3頁)であり、その有用性を消極的な意味では認めている従来の歴史反映論的な「パターン認識」の用具としての物尺的段階論のイメージが払拭されずに残ることになっているように思われるのである。これに対する私見は後に述べるとし、ここではこうした副作用が従来の段階論への回帰という問題点となって山口氏の議論のうちに潜んでいる点を確認しておきたい。

さてこうして山口氏は、この限界が実際にはどのようなかたちで原理論の展開のうちに現れるのかという点に議論を進め、次のようにブラック・ボックスという概念をもちだしてくる。「それでは、社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することの無理は、具体的には原理論の中にどのように反映されているのか。それは純粋資本主義をあたかも自立するかのごとく説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れてある点に反映されているということが出来る。」(5頁)ここでは原理論がそれ自身理論として実際には特殊な想定ないし前提のうえに展開されている点が明確にされているとあってよい。社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することには、すでに原理的に無理があることを積極的に認めているわけである。従来の原理論の展開では得てして純粋資本主義が、労働力の商品化という唯一の外的な条件さえ与えられれば、あとは市場経済的な原理だけで理論上は永久に繰り返すがごとく、その自立性を強調されてきた傾向に照らしてみると、この主張は決定的な変更を求めるものあるとあってよいし、私もまたその意義を高く評価したい。山口氏は原理論を理論として成立させる前提条件がいくつかある点を明確にし、ただその問題はこの論文で強調されている「ブラック・ボックス」に入れられているのだというのである。

この比喩的な言い回しに関しては、これから詳しく検討してゆくが、ここではとりあえずその意味がつぎのように敷衍されている点を確認しておこう。すなわち、山口氏は原理論を構成する理論展開の動力に焦点をあて、原理論の世界は私的な利得追求という経済人的行動が一元的に支配しているように捉えているが、「実は原理論においても、明示的ではないが、構成員について必ずしも経済人的とはいえない行動を予定せざるをえない場合があるのである。ただ原理論では、それは立ち入った

考察を行われぬままブラック・ボックスに入れられ、ごく消極的に扱われることによって、その対象が自立しているかのごとくに説くのである」(5頁)という。ここではブラック・ボックスに入れられる中身は、かなり限定されているとあってよい。すなわち原理論の構成員の市場経済的でない行動原理に対象は絞られているかのように見える。しかし、実際には後にみてゆくように、ブラック・ボックスに入れられているのは、必ずしも行動原理だけではないのである。

この点をどう考えるかは具体的内容を検討するなかで論じてゆくが、ここでは可能性として次のように考えてみる余地も残されている点を指摘しておこう。すなわち、原理論の自立性を支える隠れた条件は、必ずしもここでいう市場経済的でない行動原理ではなく、行動原理としては一元的であっても、それが異質な外部的条件を取り込みながらその行動原理を特定の型に変形して現実化するというように考えることもできる。これに対して原理論を支える行動原理が商品経済的なものとそうでないものと実は複数あるというのは、さきに見た混合資本主義という認識や、類型論という規定のしかたとともに、原理論と段階論とをそれぞれ異なる用具として併用するという山口氏の基本姿勢に深く関わっているであろう。しかし、原理論を構成する主体の行動原理は基本的には私的な利得追求しかないとしても、たとえば労働者の場合、その行動原理に基づく行動様式は、技能がどの程度標準化されているかとか、労働組織がどのように編成されているのかとか、家族や地域の構成員とどのような社会関係を形成しているか、などの諸条件によって変形して現れることになろう。あるいは土地所有者に関しても、借地期間がどのように定まるかとか、土地の等級差がどの程度分散しているかと、いくつかの条件によって単純な原理にもとづく行動でありながらその発現様式が変化する

ると考えることもできる。そこには食欲という単純な欲求も、つねに家畜にかじりつくというかたちで直接満たされるのではなく、人間社会ではさまざまな様式を生みだしそのなかではじめて充足されてゆくのと似た関係があるといえよう。利得追求という単純な行動原理に絞れば、そこから行動様式がつねに一義的に定まるといえるかどうか、この点が問題なのである。むしろ、このような変形や様式化のうちには、利得追求とは異なる行動原理が何割か加わったために生じたものがあるかもしれない。しかしだからといって、そうした多様性のすべてが、利得追求とそれ以外の行動原理との合成に由来するとは簡単にいえないのではないか。もし利得追求以外の行動原理、たとえば相互扶助とか怠慢さとか、あるいは義理人情とか名誉の追求や虚栄心とかがあるのなら、それらはまず除外して考えてもちろんかまない。それらはそもそも原理論の展開に不可欠な条件ではないのだから、そうしたものをブラックボックスに詰め込んで原理論を支えている隠れた条件としてその展開の内部にもち込む必要はないのである。ここでいうブラックボックスに入れられるべきものとは、それがないと実は原論自身の展開が成り立たないのだが、その中身については一般的な説明が困難な条件だったはずである。いずれにせよ、ブラック・ボックスに入れられるものがはたして原理論の展開を支える行動原理とは異質な行動原理に限定されるのか、また異質な行動原理そのものが原理論の自立性を支える条件であるのか、こうした点において山口氏の規定自体になお不明確な点が残されているように思われるのである。

1.3 ブラック・ボックスの埋め方

このように問題をつきつめてくると、これにつづく次のような説明には根本的と思える疑問をおぼえる。「ブラック・ボックスを開けて、不問に付されていた部分を埋めることになると、不問に付されていた問題の性質によって、埋め方は一義的ではなく、いろいろなケースがありうることになる。むしろ一義的でないから、つまり原理がないから、ブラック・ボックスに入れられたわけであるが、それぞれの問題はそれらが発生する際の条件によって埋め方にいろいろなケースがありうるのであり、埋め方の相違によって、社会的生産の編成の仕方にそれに応じたいろいろなケースがありうることを示されることになる。」(5頁) この説明の「埋め方の相違によって」までのところでは、基本的にブラック・ボックスの埋め方は一義的でないということをいっているのであり、それはそれでよいでしょう。これに対して、その後の部分は、埋め方の相違があるとそれが社会的生産の編成の仕方に影響しそれを変化させるとも読める。おそらくこう読まれることは本意ではないかもしれないが、しかしこの点は山口氏の真意とはひとまず別にしても充分考えておかななくてはならない論点であろう。もともとブラック・ボックスという場合、それはいわばその内部と外部とが切断されているという認識が本質をなすといつてよい。その内部がどういう構造になつていようと、外部からみてある特定の作用に対しては特定の反応が生じる、そうした装置であれば、内部の機制は問わずともよいというわけである。その意味では、埋め方の相違によって社会的生産の編成の仕方に変化が生じるというのであれば、実は埋められるべき条件がブラック・ボックスではないということの意味していることになるわけである。むろん言葉尻をつかまえて山口

氏を批判することがここでの目的ではない。ただ、私自身ぜひ考えてみたい問題がここに伏在していると感じているために、山口氏の説明に疑問を覚えるということなのである。

そこでこの点について、もう少し私見を述べてみたいと思う。原理論においてその展開を支えるいくつかの外的条件が必要であるということは無視できないであろう。誤解を生まぬようここで断っておくが、ここで外的というのは、別に内的条件というべきものがありそれとの対比でいっているのではない。ただ原理論を構成する個別主体の行動原理と反応して、特定の様式に変形され内部化されるもとの条件という意味で外的条件といっているのである。ところでこうした外的条件に関していわゆる宇野派においては、労働力商品化という一点にそれを絞ることが、これまでひろくおこなわれてきたとあってよい。アルキメデスの槌子の支点のように、この外部性が与えられればあとは利得追求原理だけで原理論体系が演繹的に導出されるかのごとき理論構成が理想化されてきたきらいがないとはいえない。たしかにそれは、もろもろの外的条件をただ羅列するのではなく、なにが資本主義を支える基本的な外的条件であるかを明確にし強調する便法として了解される範囲でなら、それはそれでかまわない。しかし、原理論を支える外的条件は、山口氏がこの論文の後半で列記しているようにそのほかにも種々考えられるのである。

問題はそれらがただ列記されるべきものなのか、という点にあるのである。もしそれらがすべて、山口氏のいうように本来の意味でのブラック・ボックスというかたちで、原理論を支える条件を構成しているにすぎないのであれば、それらを「思い付くままに羅列」(19頁)するやり方でよいことになろう。しかし、それらが原理論の展開を陰で支える条件であるということは、そのなかにはいわば原理論の本体をなす「社会的

生産の編成の仕方」に対して強く作用するものとそうでないものがあるということなのではないか。たとえばその時代の流行などたしかに市場の取引の対象には強く影響しても、その取引の様式にはあまり影響を及ぼさないものもあれば、民族の歴史・文化・慣習など、その影響が多様で間接的であるために経済主体の行動に必ずしも一義的な結果をもたらさないものあろう。これに対して、生産力水準やそれに対応する労働編成などは、はるかに「社会的生産の編成の仕方」に強く作用するであろうし、貨幣制度がどのようなものになっているかは、市場構造に対して内部的な決定要因でさえあるとってよい。こうした濃淡が実は外的条件にはあるのである。むしろこうした外的条件はそれ自身相互に絡み合っただけでなしている面があるが、その構造を一般的に説明できるような原理をそれ自身具えているわけではあるまい。そのかぎりではそれは、やはり羅列されるほかないものかもしれない。

しかし原理論の機軸をなしている利得追求的な行動に与える影響という基準で捉えてゆくと、そこには一定の関係が潜んでいると考えることもできる。粗略の弊をおそれずいえば、資本主義経済の態様に規定的な要件もあればそうでないものもあるということになる。むしろ、原理論に隠された外的条件に照明を当てることは、原理論のある意味では中心課題をなすといっても過言でないだろう。それらは与件として簡単に触れられればよいものではなく、むしろ原理論の展開自身、なにか資本主義経済を支える与件であるのかを秩序立て、それらの関係を市場の観点から明らかにしてゆくことを主題とすべきなのである。外的条件を労働力商品化に絞ったことは、ある意味では外的条件の構造化への指向を萌芽として内包しているとみてよいかもしれない。それはあまりに考慮を欠いた無理な絞り込みかたではあったが、ただ列記するのではなく重要

な与件を摘出してゆく思考動力が潜んでいると解することもできるからである。これからの原理論はこの点を意識的に追求すべきなのであり、資本主義経済を支える外的条件を一つに還元するのではなく、少なくとも複数取り上げてそれらの関係を明確に構造化して示すべきであろう。そして、その鍵をなすのは原理論を構成する構成主体の行動に対する規制力の程度を考えてゆくことなのではないかと考えるのである。

山口氏自身にもこうした外的条件と考えられているもののなかに、実は市場経済のあり方に強い影響を及ぼすものがあることに配慮し、そうした側面を原理論の展開に取り込むべきだという考えがないわけではない。たとえばいままで検討してきた「はしがき」の項の最後は次のように結ばれている。「なお、その場合、従来の多くの原理論において不問に付されてきた問題の中には、ブラック・ボックスの中に入れて、原理論の問題として積極的に展開できる、あるいはした方がよい、と考えられるものもあるが、それも一応とりあげたうえで、そのように考えられるものであるということを述べることにしたい。」(6頁)ここでは、「原理論の問題として積極的に展開できる」ということが、経済人的行動から演繹できるという意味なのか、あるいはそれに強い影響を与える条件であるということなのか、必ずしも明確ではないが、そこに事実上、以上のような含意を読みとることもできなくはないのである。ただ、山口氏自身の基本的な姿勢は、こうした方向に向かっているとは言い難いのであり、そのことはつぎのような「はしがき」部分の結論的な叙述のうちに明らかであろう。「中間理論としての段階論というのは、このいろいろなケースを整理し、類型化して示したもののことであり、これをもって多様な現実の資本主義の分析にとっての原理論を補完する第二の分析用具たらしめんとするものであると一応考えておくことにする。一応と

というのは、どのような方法によって類型を構成すべきかという問題が私にとってまだ明確に解決されておらず、今後の課題として残されているからであるが、この問題はまた別の機会に考究することにして、本稿では、原理論ではどういう問題がブラックボックスに入れられているのか、つまり、どういう問題が不問に付されることによって、市場経済システムがあたかも一元的・自立的に社会的生産を編成しうるかのように、説かれることになっているのかを、原理論の展開に沿って具体的にみていくという作業をすることにしたい。」(6-7頁)すでに述べたように、もし原理論から切り離して「どのような方法によって類型を構成すべきかという問題」を考えようとするのであれば、おそらくそれには一般的な原理はないというほかなく、中間理論といってもその点で理論たりえないであろう。山口氏はこの範囲では、やはりさきに述べたような利得追求原理とそれ以外の行動原理の二分法を基礎とし、原理論的な要因と段階論的な要因との分離可能性に立脚して、基本的に原理論といわゆる中間理論としての段階論とを別個の分析用具として並行適用すべきだと考えているわけである。こうしてこの論文はこれ以降、原理論の具体的展開のなかで山口氏がブラック・ボックスに入ると考える問題群を基本的に列挙してゆくことになるわけであるが、これまでの検討をふまえてみると、このような列挙では本来すまないことになる。これらを構造化する作業はむしろそれに関心をもつ者の責務となるのであり、以下山口氏の議論をさらに追いながら、外的条件はいかに処理されるべきか、できるかぎり考えてみることにしたい。

2 「ブラック・ボックス」の多義性

2.1 外面的ブラック・ボックス

さてこの論文の本論部分では、山口氏の『経済原論講義』を構成する「流通論」、「生産論」、「競争論」という三つの篇のそれぞれに分けて、原理論ではどのような問題がブラック・ボックスに入れられているのか、あるいは逆に従来不問に付されていた問題でもブラック・ボックスに入らずに原理論の問題として積極的に展開した方がよいのか、この点が各論的に検討されている。この論文の中心はこの各論的検討にあるとあってよいが、ただこの部分は「原理論でこれまで不問に付されてきた問題の一部を思い付くままに羅列してみた」（19頁）にすぎないということなので、以下ではそのすべてに詳細な検討を加える必要はないであろう。前項でみたように、こうした諸問題の羅列になってしまう山口氏の基本的な問題設定にそもそも難点があるように思われるのであり、ここではそう考える立場から、山口氏が例示した諸問題を整理し、その背後に潜む外的条件の構造を探ってゆくことにしたい。

はじめにもう一度、「ブラック・ボックス」の意味を確認しておきたい。「はじめに」の部分で最初にこの修辭が提示されたとき、それは次のような内容なのではなかったかと考える。すなわち従来原理論は単一の行動原理によって一元的に支配された、その意味で自立した一つの完結性を具えた体系であると見なされてきたが、実はそうではなく、あたかも自立しているかのように説明するためにはいくつかの不問に付された問題、ないし隠された条件が必要とされる点をはっきりと意識すべきなのであり、原理論はそのことを積極的に表にだして論じないが、その展開の内部にこうした条件を入れたブラックボックスが設置されていると考える

べきであるというのが、その基本的な趣旨であったとあってよいであろう。この点をめぐって前項で検討したように、さらに究明すべき点もいくつか残るのであるが、しかし少なくともここでいわれているブラック・ボックスには原理論の展開を支える不可欠な条件が入るのではなかと考えられるのである。

だが本文のほうで取りあげられる諸問題には、必ずしもこうした厳密な意味でのブラック・ボックスとは異なると思われる性格のものも列挙されているように見える。たとえば、最初にあげられている「非経済人的側面」などは必ずしもこの条件をブラック・ボックスに入れて原理論の内部に導入しないと原理論の展開が成り立ちゆかぬといった性格のものではないであろう。「この非経済人的側面は、個人の性格によっても影響を受けるであろうが、生産力の水準ないし生活水準や民族の歴史・文化・慣習などいろいろな条件によっても影響を受けるものであり、これらの条件を類型化すれば、人間行動ないし市場構造も類型化できると考えてよいであろう。したがってこの側面の導入による変化はひとまず類型的な変化として捉えられることになろうが、これはもちろん原理論の問題ではない。」(6-7頁) むろんこれが原理論の問題ではないという点に異論はないのであるが、しかしそれが原理論を支える条件として必要なのかというとそれは別の問題であり、「個々の商品所有者は経済人としてのみ想定され、それ以外の側面に基づく行動はブラック・ボックスの中に入れられる」(7頁) という場合のブラック・ボックスは、所詮原理論の内部に設えられたものではなく、それはここでは考えないことにするといった程度の軽い意味で用いられているのだと解してよいであろう。こうした原理論の外部に想定された諸条件の類型化は、けっきょく原理論と段階論とを切り離し、両者をそれぞれ独立の分析用具として

併用するという、山口氏の原理論・段階論の両面併記説的な発想にやはり由来するものなのではなかとと思われる。

この種のブラック・ボックスはほかにも見いだされる。たとえば「掛売買のような信用関係」(9頁)に関して検討し、それが基本的に利得追求的な行動原理で説明できる点を指摘したうえで、ただ誠実さや善良さに依存するような人的信用などを念頭において「与信者が受信者を信用しうる条件としては、その他にも様々な具体的諸事情があるのであるが、それらはブラック・ボックスに入れられ、段階論ないし現状分析において考察される」というかたちでもちだされるブラック・ボックスもこうした原理論の外におかれたいわば押出先としてのブラック・ボックスとあってよい。また、これとはやや異なる面を併せもつが、たとえば自然環境の問題が原理論でも扱われてよいという点が指摘された後、「資本は、その蓄積活動の結果として負の生産物を生み出すこと自体には、その処理が社会的に問題にならない限り、無関心であるから、その処理の費用を資本に負担させられなければ、国家が出勤せざるをえないことになるが、この問題はもちろんブラック・ボックスに入れらえる。」(12頁)という際のブラック・ボックスも、これが原理論の内部で前提されないとその展開が成り立たないという意味ではないであろうから、そのかぎりでは外部に補足的に想定された別種の条件と見なしうる。このことと事実上同じことになるように思われるが、「資本主義的剰余価値生産の考察の場における問題」(12頁)として三点あげられているうちの第一の「いわゆるインフラの問題」というのもそうであろう。こうした条件のあり方は、利得追求を動力とする市場構造や運動様式に直接相違をもたらすものではない。あるいはもし影響の程度という考え方が許されるならば、その程度が相対的にかなり低い要件でしかないと考えられるのであ

り、そうした意味でこのブラック・ボックスになにが入ろうと展開内容の変化が生じにくい類のものなのである。その意味ではそれは逆説的であるが、真にブラック・ボックス的なものではあるが、この種の内容は原理論の展開を支えるようなものとして原理論の内部に埋設されたブラック・ボックスとは異なるのである。

2.2 規定的ブラック・ボックス

こうした観点から捉えなおしてゆくと、反対にブラック・ボックスのなかになにを持ち込むかによって原理論のその後の展開が大きく左右されるような影響力の大きなブラック・ボックス、その意味ではブラック・ボックスという修辞に馴染まない面をもった外的条件が存在することがわかる。たとえば「流通論」のところで第2に論及される貨幣をめぐる問題ではこの種のブラック・ボックスが登場する。山口氏は「貨幣論の問題」として鑄貨の問題と本位貨幣の制定の問題を取りあげ、それらはいずれも基本的には国家の導入をまたなければ説明できないが、「国家はブラック・ボックスに入れておくしかないと考えられる」（7頁）あるいは「貨幣素材の固定、つまり本位貨幣の制定の問題は、原理論では不問に付しておいて、段階論で論ずべきことではないかと考えられる」（8頁）としている。たしかに、この場合も最終的な契機として個別的な利得追求原理だけで説明できない要因が作用するという点は認めなくてはならない。ただそこにいたる過程では、これまでも多くの論者が繰り返し指摘してきたように、少なくとも原理論の展開を通じて鑄貨を要請する基礎やあるいは本位貨幣が求められる動力に関しては説明可能な面がある。そしてここで論及されているかぎりでの国家や制度は、はこうし

た要請や動力を一方的に抑圧するものではなく、一面で特定の様式でそれに応える性格をもっているのである。ただこうした要請があれば、自動的に鑄貨なり本位貨幣なりがでてくるかのように述べてしまうあまりに粗雑な論理展開の弊は山口氏とともに強調しておかなくてはならない。

そのうえで、ここで導入されるブラック・ボックスは、前項で指摘した外面的なブラック・ボックスとは異なり、あるいはそれと比較してはるかに、原理論の展開に密着していることは否定できないであろう。言い換えれば、原理論の展開はまさしくこうしたブラック・ボックスを内部に抱え込んでおり、その結果最終的にはそこに制度的な規定をよびこみさまざまに様式化することになるのではないか。原理論の展開はある意味では本来こうした制度的な要因がどこでどういうかたちで要請されるのかという点を、市場の内部構造の分析を通じて探り出すという役割を果たすべきなのであろう。そしてこの点に向かって外的な条件が集中して作用することによって、現実の市場機構のかたちを変容させ多型化させることになるのである。本位貨幣を金属貨幣に設定するか、あるいは法貨として中央銀行券に最終的な決済力を与えるか、等々の問題は、一般的な文化的・慣習的な要因がどうであるかという問題とはかなり違ったかたちで、市場の構造や運動様式を直接変化させるのであり、こうした要因を原理論の外部のブラック・ボックスに押しだしてしまうわけにはゆかない。従来原理論が少なくとも価値尺度機能を果たす貨幣に関してその単一性を当然のこととして想定してきたとすると、その単一性は厳密には外的条件を特定の様式で組み込んだものとして導入されている点が決定的に意識されるべきなのである。逆にまたこうした制度的な規制がかりにあったとしても、現実の市場の内部においてそれに対抗するような貨幣の分散化の動力がかかっている複合貨幣的状况も理論的に

明確にされる必要があるわけである。このようにして派生する変容や多型化を原理論でどのように処理していったらよいかという方法に関しては次の項で私の考えをもう少し論じることにするが、いずれにせよ、この種のブラック・ボックスは単純な外面的なブラック・ボックスと同列に処理するわけにはゆかないことはある程度了解できるのではないかと思う。

ところで、このように原理論にいわば内面的なブラック・ボックスの特性は突き詰めてゆくと、おそらくいわゆる分化・発生論的な展開に深く根ざすものではないかと考えられる。この種のブラック・ボックスは原理論展開のどのような局面でも同じような密度で、いわば外的与件一般として遍在しているわけではない。その意味では、山口氏があげているうちでこの種のブラック・ボックスが典型的に現れるのは、信用機構を中心とした資本主義的な市場機構の形成に伴う外的条件の問題である。個別資本が私利私欲の追求を目指して行動するなかで、出発点の主体が抱えている異質な要因が、分業のメリットを生かして機能的に特化し独立した資本として分化してゆくとする議論では、たしかにこうした分化の動力は説けるのであるが、そうした分化によって生じるであろう機構に対してはつねにそれを内側から崩す力も同時に作用することになる。こうした局部に対しては、機構を激しい変動からある程度保護した方が結果的には少なくとも有利であるという場合も多く、そうした目的を担う機構や組織が外部から導入されやすいということまでは理論的にも説明がつく。中央銀行をめぐる議論などはその典型をなすといってよい。こうした問題を考えるうえで重要なのは、おそらく、どこまでが商品経済の原理で説けるか、あるいはどこまでが純粋資本主義的な規定なのか、といったいわば線引きをおこなうことではないように思われる。それははい

わば外界に開口している局部なのであり、こうした部分からさまざまな制度的な要因が流れ込んでくるわけであるから、そうした制度がどのような契機を固定しあるいは変更するのか、中央銀行に関していえば、たとえば発券なのか、準備率なのか、あるいは割引率なのか、など制度が作用する個別の契機を原理論の側が明らかにする必要がある。そしてそれらの契機が明確に把握できれば、特定の契機が制度化された場合、それに連動して信用機構がどのように全体として変容してゆくことになるのかもある程度推測できるのであり、この点こそ実は発生論的な原理論が本来解明することのできる最大の利点であったはずなのである。

ところでこうした規制力を具えたブラック・ボックスとしては、もう一つのタイプのものがある。いうまでもなく労働力商品化をめぐる一連の外的条件群である。すでに述べたように宇野原論ではどちらかというところの一連の外的条件群にまず焦点をあてそこに資本主義の基本矛盾があるという議論を展開し、その結果、ある意味ではきわめて単純化された基本矛盾、たとえば労働力は資本によって直接生産できない唯一の商品であるといった一点に問題を絞り込むことになったといつてよい。山口氏自身はこの側面をもう少し幅広く原理論の内部で考察する試みを示されてきたように思うのであるが、この論文にかぎればこの条件をやはりかなり限定的に設定し多くのものをブラック・ボックスに閉じこめようとしているように見える。労働力商品に関するブラック・ボックスも「資本主義的剰余価値生産の考察の場」に関わる三つの問題の第三番目として位置づけられており、その特異性が必ずしも明確でないうえに、「労働力の形成の問題、つまり教育・学習の問題」と「日常生活の問題」に分けて論じているのであるが、「これらの具体的過程はいずれもブラック・ボックスに入れられ、一定の価値観と一定の能力をもった労働者が所与

とされる。労働者は市場では経済人として行動すると想定されているが、家庭など市場以外では必ずしも経済人的行動をするとは限らないものとしてブラック・ボックスに入れられるわけである」(13頁)と簡単に線引きがなされるわけである。たしかに、こうした簡単な想定をおくこと自体はもちろん自由であり、それは前提された外部の条件であり、ここでは労働力をめぐる複雑な要因は捨象したのだというならそうとしかない。ただその前提は、労働力の内容そのものをかなり限定していることは自覚しなくてはならないし、逆に必ずそう想定しなければならないという強い必然性があるわけではないことも意識する必要がある。すなわち山口氏があげている点はほとんど機械的・物理的な側面に加工された労働力を切りだすためのものであり、そうした限定のうえで労働市場とそれ基礎に作動する市場機構を分析することに何らかの関心があるからそうしたかなり無理な単純化をはかったということなのであろう。しかし、もちろんここで捨象してしまった要因、労働者の生活様式、技能の形成、労働組織のあり方などいくつかの契機が特定されれば、労働市場や市場機構の構造と運動は変容することになる。それがどういう回路で変形するのか、この点はこのような単純化の極限を外挿しただけのいわば物尺的な理論では分析しようがない。かかる単純化をすればこうなる、ということがいえたとしても、ではその単純化の一つの条件を緩めたとき、それが全体の構造をどう揺るがしてゆくのかは、こうした理論構成ではわからない。ただ単純化したときと同じようにはならない、という結論がでてくるだけであろう。これからの原理論はこうした方法を脱却して、たとえば労働力に関して技能的な要素が労働過程で強まったときに、労働組織のあり方がどう変化するか、またその結果、労働市場の作動メカニズムがどのような影響を受けるのか、こうした関係を明確に分

析できる方向に再構築してゆくべきなのである。いずれにせよこのように考えてくると、少なくとも、労働力商品化をめぐる外的条件は、それをどう設定するかが原理論の展開内容にやはり強力に影響する規制力の有したブラック・ボックスであり、その意味ではやはりブラック・ボックスと称するには相応しからざる外的条件群である点は理解できるのではないだろうか。

このような規制的なブラック・ボックスは原理論全体を通してみると、それ自身ある構造をもっていることに気づく。それはバラバラな与件なのではなく、市場との関連でみると実はあるまとまった関係の束を形成しているのである。いわゆる生産論の中心問題をなすのはこうした構造の解明であるといってもよい。しかも資本主義経済はこのような開口部を一つではなく複数具えている。山口氏のブラック・ボックスという修辞は、こうした開口部が労働力商品化以外にもあることを示唆する意義をもってはいるが、このブラック・ボックスという比喩は同時に、この開口部が資本主義経済の変容や多型化の契機であることを看過させる点でやはり賛成できない。たしかに原理論に制度や慣習といった条件を無節操にもちこんで理論展開を曖昧することは原理論の自殺行為であろう。行動原理というならそれは利得追求原理で貫くべきであり、慣習とからませたり利他的行動と混交することで、原理論を類型論に終わらせるべきではない。しかし、逆にまたこうした行動原理が貫かれる場の構造を単純化してしまえば、資本主義経済の多様性の分析のためには原理論の外側にただ場合分け的な類型論を別個に開設するほかないわけである。その意味で一見正反対にみえても、原理論に無節操に外的な条件をもちこむ方法と、それを可能なかぎり排除しようとする方法とは結果において大差ないのである。重要なのはこの間の隘路を突破することであり、そ

の途は資本主義経済の構造と運動に影響を与えるような外的条件群の構造を解明し、それが一点ではないとしてもいくつかのできるだけ少ないポイントに絞り込む方法によってはじめて拓かれるのではないか。原理論である以上、締めることが重要なのであるが、しかしそれは切り捨てるによる一点への単純化とは根本的に異なる点を銘記しなくてはならないのである。

こうした観点から原理論をながめなおしてみると、いまのところ、資本主義経済において多様化の刺激をうけやすい過敏な開口部はそういくつもあるわけではないことが分かる。たしかに、貨幣信用制度と労働をめぐる問題のほかにも、土地に代表されるような自然とその市場を通じた利用形態など、こうしたものがたいくつかあるように思われるのであり、その発掘作業こそ原理論の今後の課題となろう。見事な牡丹の刺繍はたしかにその具象を一貫して彷彿させるが、裏を返してみると、そこには具象を具象たらしめんとする複雑な糸目の遣り繰りがあり、その工夫の中心となるような要の縫い跡が隠されているものである。鑑賞者は表地の華麗さ、精緻さを愛でるのかもしれないが、職人はもっぱら裏地のほうをみて細工を施す。原理論もその完成した表地を評価するだけではなく、裏返してはじめて分析用具としての妙味が会得できる仕掛けになっているのではないだろうか。

2.3 暫定的ブラック・ボックス

ところで山口氏の議論にもう一度戻ってみると、以上の二種類のブラック・ボックスの場合とは性質の異なる問題にやはりブラック・ボックスという修辭が用いられているように思われる。それは「従来の多くの原

理論において不問に付されてきた問題の中には、ブラック・ボックスの中に入れないで、原理論の問題として積極的に展開できる、あるいはした方がよいと考えられるもの」(6頁)に関わるのかもしれないが、事実上規制力をもったブラック・ボックスの原理論における処理方法を示すことになると思われるので、そうした観点からここで検討しておきたい。

この第三のブラック・ボックスにもいくつかの側面があるが、いわば原理論の展開のなかで、ある段階では伏せておくべき条件というものがあるという含意がこめられているという点で、総じて原理論自身の展開方法に深く関わるブラック・ボックスであるといつてよい。その意味でこの種のブラック・ボックスを暫定的というとするれば、それは規定的とよんだものと同様、実は原理論の展開内容を左右する力を秘めていることがわかる。ただ規定的なものが外部性を強く具えているのに対して、暫定的なものは理論を構築するための内部手続きとしてそうされている点で区別されるわけである。その一部は理論展開の結果として、まさに原理論内部でそれを支配する一元的な行動原理によってやがて内発的に施錠を解除されるブラック・ボックスとして位置づけられているのである。

山口氏の議論に即してもう少し具体的にみてみよう。たとえば山口氏は「流通論の最後の資本形式の問題としては、資本の行動基準としての利潤率についての前提がある」(10頁)として、年利潤率の最大化ほかに、資本の移動を制約する要因が強く意識される場合などには、売上利潤率やさらに単なる利潤量そのものの最大化が目標となることもありうる点が指摘される。それをうけて、「原理論では最初にみたような年利潤率以外の行動基準はこれまでは一般に不問に付されてきたといつてよいが、これらは別にブラック・ボックスに入れておく必要はないかも知れない。資本の行動が一元的基準によるものとしなければ、市場経済の自立

性があやしくなるというわけのものでもないであろうからである。あるいはこのような年利潤率以外の行動基準には段階的・地域的類型があるというようなものでもないように考えられるからである。むしろ原理論においてもいくつかの行動基準の類型を羅列的に説いておいて、段階論以降で改めて、生産力水準、産業構成、景気の局面などの相違に応じて主導的行動基準が変化することを典型的に考察するという方法をとった方がよいのではないかと思われる。」(11頁)という結論がくだされる。

ここではブラック・ボックスに入れておく必要がない理由が二つほど示されているようにも見えるが、このうちのとくに第二のものは、字義どおり卒然と読むと理解しがたいところがある。利潤追求行動をはかる基準には段階的・地域的類型がないから、原理論においてもいくつかの行動基準の類型を羅列的に説くべきだということと、段階論以降でそれを典型的に考察できるということとの関係がはつきりしないのである。おそらく原理論的な類型化と段階論的な類型化とは違うということなのであろうが、それにしても原理論で文字通り「羅列的に」説いてしまったのでは、「生産力水準、産業構成、景気の局面などの相違」を考慮に入れたとき、どのように「主導的行動基準が変化する」かを分析する役には立たないであろう。実際山口氏もこの直前の段落では、利得追求活動がその発現の場の構造によって多様化せざるを得ないという点を示唆しているものであり、「羅列的に」という点にこだわらず、むしろ原理論内部で多様化が説明できるといっているのだと解釈し、その意味で同意できるというべきなのかもしれない。

いずれにせよ、原理論自体にはこうした多様化を生み出す契機が内包されている点が自覚されるべきでなのあり、たとえば景気循環のなかである条件を明確にしてゆけば、どのような利潤率概念が主導的となるか

も原理論の問題として考えられるのである。このように考えてよいのであれば、第一の理由としてあげられている資本の行動が一元的基準による必要はないという点も、資本の行動原理が多元的だということではもちろんなく、ただその行動を制約する部門間移動の困難性などの条件が強く作用すると資本の行動原理の発現形態として利潤率の算定方式がその条件を反映して変化するというように解しうることになる。とすれば、こうした点が「これまで一般に」どうで扱われてきたかはともかく、原理論の中心課題とすることになんら問題はないであろう。むしろ、固定資本の制約や無規律な価格変動や分散という条件のもとで、個別資本がどのような利潤率構造を通じて私的な利得追求をめざすのかは、少なくとも山口氏の「競争論」の出発点をなす利潤論の焦点をなす問題でもあるはずなのである。

事実山口氏は、このような利潤率概念に含まれる多義性の問題をふまえながら、「第三篇『競争論』の諸問題」のはじめのところで次のように述べる。「一般的利潤率の形成には資本移動の円滑さが前提されている。つまり資本移動に伴う諸困難が不問に付されている。しかし、この前提は必ずしも原理論全体を通じて維持されなければならないわけでもないものであって、商業資本、銀行資本、証券業資本などを組織者とする補足的競争機構の展開は、資本移動（資本配分の変更を含む）の困難の解除機構の展開という意味をもつものともいえるのである。」（16頁）すなわち、「従来の諸研究において、仮定のはずし方、諸困難の導入の仕方が必ずしも明確な方法に基づいた体系的な形で説明されてきてきているとはいえないにせよ、資本移動の諸困難は原理論全体を通じてブラック・ボックスに入れられているわけではないということではできよう。」（16頁）というのである。とすれば、原理論はこうしたかたちでブラック・ボック

スを内部に暫定的に仮設して、そのもとで利得追求活動がどう展開されるのかを確かめながら、順次そのブラック・ボックスを開けてゆく、あるいはそこにいくつかの外的条件を挿入してゆくことで実質的には資本主義経済の変容を分析する理論を構築していることになるものとみてよいであろう。こうした外挿ポイントをもブラック・ボックスとよぶとすれば、それはまさしくそこになにをもちこむかによってその後の原理論の展開が大きく左右される、その意味で規制的なブラック・ボックスであるといつてよい。このようにみてくれば、さきに20頁のところでは後回しにした規制的ブラック・ボックスによる変容や多型化の処理方式の一つのかたちはここに事実上示されていることになる。原理論の展開は、こうして一方で規定力をもった外的条件を強く要請する開口部を絞り込みながら、他方でそこに、たとえば固定資本による移動制限とか、流通過程のもつ不確定性とか、あるいは自然条件の不均質性とか、いくつかの設定を加えてゆくことで資本主義経済全体の構造変化や運動様式の変容がどのように生じるのかを理論的に明らかにするものとなるのである。

最後にこの種のブラック・ボックスに関してもう一点、「これは原理論におけるブラック・ボックスの問題とは関係がないが」としながら、山口氏が論及している「生産論にだけみられる特殊な想定」の問題にふれておくことにしよう。ここでは個別資本の不均質性が生産論においてはひとまず不問に付され、価値法則の論証の場合にはそれと同時にまた需給調整の円滑さも想定されなくてはならないといった特殊な想定が導入されているが指摘される。こうした点に関して山口氏は次のように論じる。「短期ないし中期をとると問題にせざるをえないであろう需給調整上の様々な困難ないし不均衡をブラック・ボックスに入れておいて法則性を抽出するわけであって、その点でいえば、ここでは短・中期の問題を

不問に付して、長期で問題が考察されている、あるいはむしろ短・中・長期の区別をなくして、いわば抽象的な時間を想定していることになるかも知れない。具体的な時間の導入はある程度は競争論で行われることになるが、もちろんそれにも限度があり、つまりそこでもブラック・ボックスに入れておかななくてはならない問題が残ることになり、さらなる具体化は段階論以降でということになる。」(15頁)ここで指摘されているような不均質性や円滑な需給調整の想定がはたして生産論の想定に特有なものかどうか、私自身はたとえば一般的利潤率もこうした想定のうちにはじめて規定されるのであり、それが流通過程の偶然的要因や固定資本の制約にもとづく生産条件の格差のもとで、どのような規制力を発揮するかを解明することが利潤論の中心課題をなすという立場にたつ。しかしこれは原理論の内容であるので別の機会に論じることとし、ここでは山口氏の原理論の展開内容を認めただけでただそれをふまえた方法論の問題に検討を戻そう。その場合すぐにわかるように、ここでのブラック・ボックスは、文字通り暫定的なブラック・ボックスそのものとなる。そして生産論で残されたブラック・ボックスは、つづく競争論のなかで一部は開示されそれに対する資本の行動が分析されるという方法があり得るとされている点はさきに確認したとおりである。そのうえでここでは、こうしたブラック・ボックスの漸次的な開示、あるいはそこへの条件の追加という方法は、原理論から段階論へと見方によってはある連続性をもってつながってゆくようにもとれる。言い換えれば、こうした暫定的ブラック・ボックスを原理論のなかに埋め込み、それを順次具体化するという方法を積極的に採用するならば、原理論と切断された段階論を設定する意味は薄らぐことになるのである。

このように考えると、経済原論の構成主体の行動原理はそれをつねに

一元的に保持したとしても、それが発現する様式は、いくつかの条件がその構造を規定している場によって変容するということになる。そうだとすればこの場の設定自身は、理論を構築する目的に応じてある程度自由におこなってよいのではないか。理論を展開する主体の関心は、こうしたかたちで原理論のうちに投影されざるをえないのである。このような立場は、少なくとも資本主義経済の発展過程をなんらかのかたちで反映し、ある必然性をもって外的条件も与えられるのであり、それを類型化するという方法で段階論も形成されるべきだという立場とおそらく対立することになる。しかし振り返ってみると、原理論の展開方法のなかには、元来こうした理論を展開する側の理論的関心が作用してきた展開局面がないとはいえない。たとえば、単純再生産をひとまず想定してこれとの対比で拡大再生産の条件を分析するという方法は、生産価格をふまえて現実の市場価格の変動を説明するという方法や、あるいは産業資本一般をふまえてそこから商業資本の特性を捉えるという方法にも通底するが、原理論において多用されてきたこうした対比という修辞であり、そこに理論を展開する側の理論的関心が投影されているのである。少なくともそれらは、そこで対象となっている構成主体の側の行動の軌跡をたどるかたちで構成されたものとはいえない。こうした点からいっても、理論を展開する側の役割を極端に消極化し、あたかも商品経済的原理でどこまでが説明可能か、また説明できない要因を原理論の外部でどのような類型化したらよいか、少なくともこうした方向に原理論の研究対象と方法を限定する必要はないように思われる。山口氏の議論のなかにはこうした自己限定を脱する方向性が秘められているのであるが、ブラック・ボックスという修辞においては、逆に原理論の限定性とそこから排除された外的条件の類型化という方向に傾斜しているようにみえるので

ある。これまで詳しく検討してきた部分に続き、山口氏の論文では最後に「小括」がおかれ、そこではまさしくこの外部に押しだされた諸条件の類型化の道筋が論じられているのであるが、それはもはや如上の関心の及びゆかぬところゆえ、その検討は割愛することにする。